

おおひく ま ゆ み
大福 真由美

電機連合・書記長

美しい日本・幸せな暮らし

戦後60年・干支^{えと}ひと巡り^{めぐ}からまた新たな一歩が踏み出された。

振り返れば、わが国は敗戦の焼け野原から立ち上がり、貧しさをバネに世界の奇跡とまでいわれた経済復興を成し遂げ、今日では先進国の中の枢要な地位を占めるに至っている。とはいえ、この60年間に全て順風満帆であったわけではない。とりわけ最後の10年～15年間（一般には「失われた10年とも15年」ともいわれているが...）は、なんとも表しがたい閉塞感にさいなまれ、実につらい時期であったことを忘れるわけにはいかない。景気は長期に低迷し、産業・企業も業績を思うに任せられず、それまでに経験したことのない「どん底」を這う辛酸を舐めもした。完全雇用を標榜し世界に誇った雇用状況もいつの間にか一変し、失業が身近なものとなってしまった。非典型といわれる働き方のヒトが増え、これまでの労働法制では律しきれず多くの法改正も行われてきている。また、フリーターやニートなどに象徴される若者の雇用問題も浮き彫りとなってきた。さらには、こうした不安定で不透明な世相を反映してか、暗澹とする刹那的・猟奇的な事件が引き起こされ日常化の兆しさもあり、まことに危惧を禁じえない社会となってきた。詰まるところ、そこには戦後の復興・成長・発展を支えてきたあらゆるシステムが有効に機能しなくなってきた姿があり、新しい時代への転換を求める機運が一段と高まっている現況だといえよう。

そんなわけだから、すがすがしい気持ちでこ

の年の平安を願い、希望に燃える気持ちを湧き立たせたいところだが、なによりもまず落ち着かない気持ちや不安感を取り除くことから始めねばなるまい。もっともいつの時代もその変わり目はこんな不安定な状況であったに違いない。たとえば、近世では「明治維新」といわれた時期がそれに該当するのだが、確かにおびただしい血と多くの命が失われた。しかも四半世紀もの間、二つの時代が抗いあったことは歴史に刻まれた通りである。現代では「第二次世界大戦（太平洋戦争）前後」となるが、これまた大戦突入から敗戦、戦後復興を経て昭和31年に出された経済白書による「もはや戦後ではない」と宣言されるまでの20年余りの間、とくに戦争での計り知れない血と命に贖われた平和の到来が記憶に残っているのである。それらに比べれば、この節の変り目は少なくとも「無血」であったという意味で「良」とすべきなのかもしれない。

幸いにも、昨年から今年へと連なる社会・経済の動向は、ようやく明るさを確かなものとする流れの中にあるようだ。マスコミに報じられたように「過去最高」（2005年12月13日付・日経新聞）の指標が続出している。海外投資収支の黒字しかり、特許収支も黒字化し、その額も新記録だという。上場企業の連結経常利益もこの3月期で3期連続最高益を達成する見込みだ。配当総額しかり、雇用者数も過去最多の記録を更新したという。まだまだ挙げれば枚挙に暇がないほどだ。だからこの時期を逃すことな



く成熟化(低成長)社会にして少子高齢化社会、グローバル競争化社会、情報化社会における「新たなプラットホームづくり」と、その上に乗っての「安定成長モデルづくり」にそれぞれが知恵をふり絞らねばならない。もちろん国や政党をはじめとして、まさに「百家争鳴」様々な識者がその対応を巡って論争しきりであることは承知している。だがもはや神学論争の域であってはならない。なんとすればそれは、年々歳々、時代の流れ・変化のスピードが増しているだけに、少しの対応の遅れが不安・不信を増大させ社会の瓦解を招きかねない危うさを秘めているからだ。そこで、労組という立場でなにが提起できるのかを考えてみた。その結果まことにいい得て妙なるキャッチフレーズを探り当てた。それが表題の「美しい日本・幸せな暮らし」である。短い言葉の中にこれからのわが国の実現すべきことや、あるべき崇高な理念が示されているといえないだろうか。実はこのキャッチフレーズの種明かしをすれば、かれこれ四半世紀前(1992年)に策定された新生・電機連合(それ以前は「電機労連」)へと変身する際に制定された基本理念の一部を変えたものなのである。純正の内容は、「美しい地球・幸せな暮らし」である。「地球」を「日本」に変えたのは、今が日本にとって正念場であり、うなだれてきた日本を改めてしっかりと立たせ美しくして見せることが、まさに地球全体の美しさにつながるに違いないと考えたからだ。

ところで、「美しい日本」という場合、いっ

たいなにかがイメージされるのだろうか。当然ながらまず「自然環境の美しさ」があるだろう。だが、単に見た目だけでなく内面の美しさという点で以下の二つの点は欠かせない。それは、一つには「社会や各組織が人の目線に立った機能的で柔軟な頼りがいある存在」となることができるかどうかであり、二つには「人の持つインテリジェンス(知力)を高め、助け合うやさしさを育み発揮」することができるかどうかということだろう。「自然環境」の美しさも大切だが、なによりも新たな社会に欠かせぬという意味で、内面の「美しさ」にプライオリティーをおかねばならないということがより大切な点だ。まさに物の豊かさを追求した時代から心の豊かさの実現という領域に、真に入ってきたということに他ならない。これができればこそ、新たな時代の「幸せな暮らし」という形が生まれ、定着化することにつながると信じるからだ。

さて、「組合無用論」が取りざたされて久しいが、こうしてみればまだまだ組合の果たす役割はありそうだ。「美しい日本・幸せな暮らし」は単なるキャッチフレーズではなく、その背景にある多角重層的な使命や課題を包含している。その実現に向けた活動が組合再生の起爆剤になるならば望外の幸せと密かに期待している。新たな60年、組合の一步はまだ始まったばかりである。